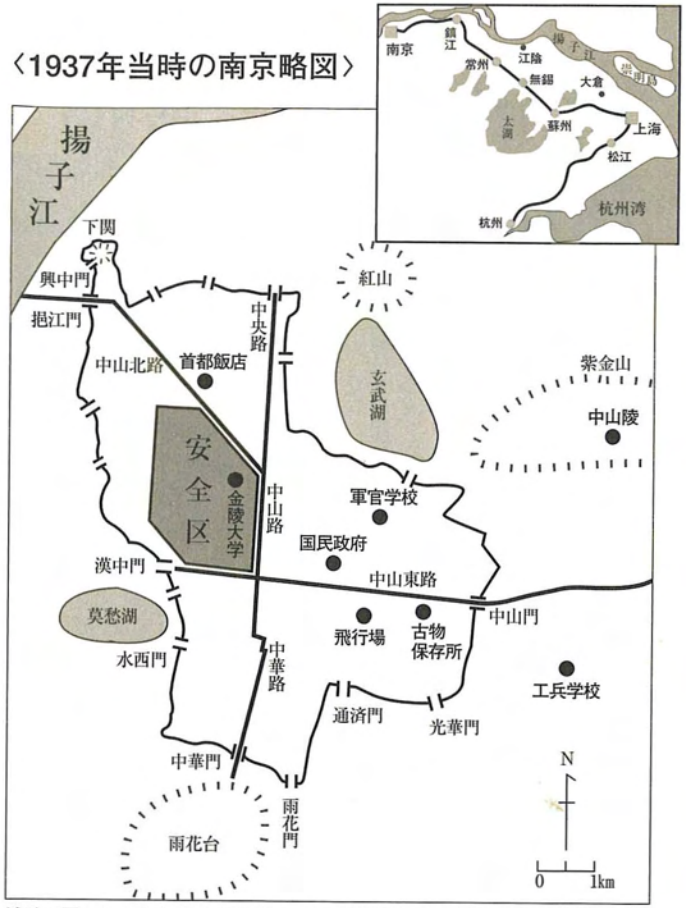
第一章 ジャーナリストの見た南京

……事件と言うようなものはなかったと思います。私も見ていませんし、朝日でも話題になってません。また、あの市民の数と中国軍の動きでそういうことが起きるはずがありません。私が上海、南京で見た死体というのは、最初、黄浦江の船の周りにあったたくさんの中国兵と、上海市街戦での戦死体です。あとは南京の城壁ですね。城壁の死体はきれいなもので、首を斬られたとかいう虐殺されたものではありません。（大阪朝日新聞・山本治上海支局員の証言より）

「中国人は日本人カメラマンが行くと、積極的に子供を抱えて撮影に協力してくれる。日本兵やを日本人を恐れていなかった」（佐藤振寿氏、昭和12年12月15日、南京安全区にて撮影）

〈1937年当時の南京略図〉



城壁で囲まれた南京城内の面積は、現在の東京・山の手線で囲まれた地域の広さとほぼ同じである。そのうち、安全区内の面積は約3.8平方キロメートル。

一・朝日新聞

大阪朝日新聞・山本治上海支局員の証言

山本治氏は昭和三年、上海の東亜同文書院を卒業した後、徴兵で入隊した。幹部候補生として少尉になる。除隊後、大阪朝日新聞社（現在の朝日新聞）に入社、東亜部に配属になった。大阪朝日新聞の東亜部はアジアにあるすべての支局を管轄している。山本氏は、専門が中国だったので、終戦までほぼ一貫して中国関係のコースを歩むことになる。

昭和十一年七月、新京支局員になり、昭和十二年四月にはさらに南京支局にかわった。南京では戦後政界に転じた橋本登美三郎氏が支局長をしていた。山本氏が加わって二人になる。まもなく蘆溝橋事件が起きた。

――蘆溝橋事件の起きる頃の南京はどうでした？

「南京は中国の首都ですけど、日本人はそんなに多くなく、医者、満鉄社員、大使館関係者、軍関係者など百人ほどです。日本の旅館も一軒あったきりで、上海の二万人と比べればわずかです。

各新聞社の支局も大体一人ずつで、橋本さんは中国語がわからないというので、私が行

って助けることになりました。二人いるのは朝日ぐらいでした。

蘆溝橋事件が起き、険悪になってきたので、私も橋本さんも家族を帰しましたが、七月下旬頃には各社の支局員も南京を引揚げはじめました。

しかし、その時、橋本さんが、『こういう時こそ新聞が働く時だ。朝日の記者としてやろう。山本君、私に命をあずけてくれ』と言いまして、われわれは最後まで残りました。

橋本さんはああいう人ですから、揚子江上流から引揚げてきて南京に残った日本人の面倒なんかみたりしてました。橋本さんは満州事変の時、関東軍の板垣（征四郎大佐）参謀と一緒に馬占山（満州の馬賊）のところに行ったくらいで、その時、板垣参謀は責任を持って橋本さんの体を守ると言ったそうです。それに比べ南京では大使館が早く引揚げてくれと言うので不満だったようです。

私は、揚子江上流からどんどん日本の軍艦が下っていくのを見て、ああ、もう日本と中国もこれで終りだな、と思ったものです」

――最後には青島に脱出しますね。

「八月十五日に、南京に最後に残った数十人が列車で発つことになりました。列車は蔣介石直系の兵隊が胸に蔣介石の写真を付けて守ってくれましたが、列車の窓を板で覆って、三十六時間、車外の様子を見ることはできませんでした。私はカメラ一つで脱出しました。（国民党の）中央軍が次々と北上してましたから、それと前後して北上した訳です。その時は上海への脱出が不可能で、南京から北上して済南経由青島に脱出したのです」

——その後は？

「橋本さんは東京に戻りましたが、青島にもたくさんの日本人がいましたから、私は青島に残って取材を続けることになりました。それから一週間ぐらいで大阪本社から、大阪・神戸で南京における体験の講演をするようにと呼ばれました。それで大阪に帰りました。

まもなく上海派遣軍が上海上陸作戦を始めましたので、上海支局員を命ぜられました。八月下旬頃で、すぐに上海に向いました。黄浦江に着きましたら、船のまわりは中国兵の死体がたくさん浮いていました。その時はいよいよ戦場だと思いました」

——その時、上海支局は何人くらいですか？

「白川（威海）さんが支局長で、そのほか森山（喬）さんなど全員で四、五人です。

私が呉淞に着いた時、上海の街は猫の子一匹いない状況で、まだ軍司令部も設置できない状況でしたから、波止場から支局まで車でフルスピードで行ったものです。

支局のあったホテルには軍の報道部もあり、私がここに行って検閲してもらう仕事を担当していました」

——検閲の実態はどんなものですか。

「検閲のはっきりした基準というものはなく、とにかく軍のこれからの動きがわかるような記事はだめでした。私はその年の四月まで新京支局にいて関東軍の検閲を経験していましたから軍の検閲は大体わかっており、私の持っていくものはほとんどフリーパスでした」

——前線も取材しましたか。

「ええ、その頃、東京や大阪からも記者が来るようになって、彼らと一緒に取材してました。揚子江岸の白茆江における重藤部隊の上陸作戦も各社一人だったので、その時は朝日から私がただ一人取材しました」

——山本さんが南京に行くのはいつですか。

「蘇州に行った時も上海に戻り、前線に行っては上海にいるということを繰り返していましたが、その時は橋本さんと一緒だったと思います。

入城式の日は、上海を最初から従軍取材しているというので、陸軍の飛行機が連れていってくれました。着いたのは午後で、入城式の終わった後でした」

——南京の様子はどうでした？

「城壁の周りには中国兵の死体がありました。

中山門から見た時、城内には何カ所も煙が上っているのが見えました」

——城内の様子はどうでした？

「特別変わったことはありません。南京で印象的なのは城壁で中国兵の死体を見たくらいです」

——虐殺があったと言われてますが……。

「全然見たことも聞いたこともありません。夜は皆集りますが、そんな話は一度も聞いたことはありません。誰もそういうことを言ったことがありません。朝日新聞では話題になったこともありません」

――難民区（安全区）はご覧になってますか。

「難民区は兵隊や憲兵がいて入れませんでした。そういうことですから市民は安全でした。一般の市民の死体というのはひとつも見ていません。紅卍字会の人が戦死体をかたづけたりしていました」

――南京には何日間いました？

「数日間いて自動車で戻りました」

――その後は上海にいたのですか。

「そうですが、杭州に第十軍がいましたから、一月になって杭州支局長として杭州に行きました。杭州に着いてしばらくして、杭州の特務機関長から家族を呼んで下さいと言われたので、家族を呼びました。一月頃はまだ和平の動きもありましたが、その頃はもう和平もなくなり、日本軍も長くいるんだということを中国に知らせるつもりだったようです」

――上海や杭州でも南京虐殺は聞いてませんか。

「一度も聞いてません。上海支局長の白川さんは軍の最高幹部ともつきあいがありましたけど、白川さんからも聞いたことはありませんでした。

徐州作戦に従軍した後、私は体を悪くして昭和十三年夏に日本に帰ってきました。神戸へ着いたところ、神戸のホテルで、南京では日本軍が暴行を働いたそうですね、と言われてびっくりしました。なんでも外字新聞には出ていたということです。

上海にいる時、私は中国の新聞を読んでいましたが『血戦光華門』などという文字が大

きく載ったのは見たことがありますが、南京についてのそういうことは何も出ていませんでしたから、不思議に思ったものです」

――最近よく言われていますが……。

「事件と言うようなものはなかったと思います。私も見ていませんし、朝日でも話題になってません。また、あの市民の数と中国軍の動きでそういうことが起きるはずがありません。私が上海、南京で見た死体というのは、最初、黄浦江の船の周りにあったたくさんの中国兵と、上海市街戦での戦死体です。あとは南京の城壁ですね。城壁の死体はきれいなもので、首を斬られたとかいう虐殺されたものではありません。戦死体は弾が当って死ぬのできれいです。

それと虐殺という表現ですが、戦場では、普通最も悪いとされていることが、最大の功績になるわけです。平和になって平和時の感覚で言うのは、何も意味がないと思います。そういう基準で虐殺と言っているような気がします。

私は昭和十五年になって召集され、少尉として従軍しました。この時は自分で攻撃命令も出したこともあります。ですから自分で戦争もしていますし、また、記者として客観的にも見ていますが、そういう体験からみても虐殺事件というのはどうでしょうか」

山本氏は定年まで朝日新聞にいて、退社後、京都府長岡京市の広報紙の編集にたずさわるようになった。まもなく長岡京市では日中友好のための訪中団が結成され、市長が団長となった。その時、山本氏が秘書長として行くことになり廖承志（初代中日友好協会会長）、

孫平化（中日友好協会会長）と会った。戻ってから山本氏が中心になり中国の都市と姉妹都市をつくることになり、山本氏はよく知っている杭州との姉妹都市を結ぼうとしたが、中国側の都合で寧波になったという。十代から七十代まで中国とよく関係のある人である。

話をうかがったのは山本氏が八十一歳の時であるが、元気な方で、二時間以上にわたって休むことなく話してくれた。

東京朝日新聞・足立和雄記者の証言

昭和五十九年秋、足立和雄氏に、陥落後の南京の様子をうかがいたいと申し出ると、お役に立てるかどうか、都合のいい日はこれこれの日です、という返信をいただいた。そこで、さっそく指定された日の朝、電話を差し上げた。すると、

「それほど話すことはないと思います。電話で済むようでしたら、電話でどうぞ」

との話である。しかし、電話で済まされることではない。そこで、

「お聞きしたいことは簡単なことですが、項目が二十くらいありますので、お会いしてお聞きしたいのですが」とお願いした。その後しばらく電話でのやりとりが続いた。そのうち、だんだんやりとりが変になっていった。

「南京虐殺とおっしゃってますが、私は大虐殺なんて見てません。あなたがどの様な立場の人か知りませんが、大虐殺の証言はできません」

「足立さんが大虐殺を肯定しているのか、否定しているのか知りません。ただ、当時南京にいた人に、南京で見たことを話してもらいたいと思い、お願いしているのです」

私の一方的なお願いなのに、このように言い合いのようになってしまった。

足立氏は戦後、『守山義雄文集』に「私と南京大虐殺」なる文を書いている。南京大虐殺を認めているのかもしれないと思っていた。しかし、私が聞きたいのは、足立氏が南京で直接見たことである。

ようやく、「わかりました、いらして下さい」との返事をいただいた。

足立氏ははじめ第百一師団の従軍記者として参加し、上海戦線を取材した。上海戦線が終息し、南京攻略戦が始まると南京に向った。第百一師団は上海にとどまったままで、のちに杭州攻略に向った。そこで南京城に入っていた足立氏は、第百一師団を追って再び南下した。足立氏が南京にいたのは十日ほどである。

――南京で大虐殺があったと言われていますが、どんなことをご覧になってますか。

「犠牲が全然なかったとは言えない。南京に入った翌日だったから、十四日だと思うが、日本の軍隊が数十人の中国人を射っているのを見た。塹壕を掘ってその前に並ばせて機関銃で射った。場所ははっきりしないが、難民区ではなかった」

――ご覧になって、その時どう感じました？

「残念だ、とりかえしのつかぬことをした、と思いました。とにかくこれで日本は支那に

勝てないと思いました」

——なぜ勝てないと……。

「中国の婦女子の見ている前で、一人でも二人でも市民の見ている前でやった。これでは日本は支那に勝てないと思いました。支那人の怨みをかったし、道義的にもう何も言えないと思いました」

——そのほかにご覧になりましたか。

「その一カ所だけです」

——大虐殺があったと言われていますが……。

「私が見た数十人を射ったほか、多くて百人か二百人単位のがほかにもあったかもしれない。全部集めれば何千人かになるかもしれない」

——南京城外はどうでした?

「城外といっても上海—南京間は戦闘行為でしょう。郊外を含めて全部で何千人か、というところでしょう」

——そうすると、ほとんど城内であったということになりますね。

「そうでしょう。青年男子は全員兵士になっていて、城内には原則として残っていないはずだ。いるのは非戦闘員で老人・婦女子だけだ。もちろん全然いない訳ではないが、青年男子で残っているとすれば特殊な任務を帯びた軍人か便衣隊だと思われていた。便衣隊は各戦線で戦いの後、日本軍の占領地に入って後方攪乱や狙撃など行なっていましたからね。

逃げないで城内にいるということは、敵意を持っていると見られても仕方ない。軍は便衣隊掃蕩が目的だったが、あるいはやりすぎがあったかもしれない」

——城内外に合わせて数千人あったということですね。

「全部集めればそのくらいはあったでしょう。捕虜を虐殺したというイメージがあるかもしれないが、それは、戦闘行為と混同しています。明らかに捕虜だとわかっている者を虐殺はしていないと思います」

——当時の従軍記者で大虐殺を証言している人もいますが、例えば今井正剛記者。

「今井君はもう亡くなってますから」

——今井記者をよくご存知ですか。

「今井君は同じ社会部で接触はありました。親しくはありませんでしたが。亡くなった人のことは言いたくない」

——お気持はわかりますが、今井記者のことで知っていることをお聞かせ下さい。

「今井君は自分で見て書く人じゃなかった。危険な前線には出ないで、いつも後方にいたと聞いている。南京でもカメラマンなど何人か死んでますからね。今井君は人から聞いたことを脚色して書くのがうまかった。筆を走らせるというのかな。しかし、文はうまいとされていた」

——今井氏は入城式の原稿も見ないで書いたと言われますが、いわゆる予定稿というやつ。

「一般に予定稿というのはあった。天皇陛下が出席される行事などはそうだった。当日、

一緒に行動して予定の変更があれば訂正する。今井君の南京の入城式の記事が予定稿だったかどうかは記憶にないが、締切に間に合わせるためには考えられることです。

入城式の記事は別にして、今井君の原稿にはフィクションがあったかもしれない」

――守山義雄記者については？

「守山君とは親しくしていたし、尊敬もしていました」

こう言いながら足立氏は本棚から『守山義雄文集』を取り出してきた。『守山義雄文集』は昭和四十年四月、守山氏が死んでから八カ月後に作られたもので、守山記者の足跡と、親しかった人の思い出からなっている。

「守山君が亡くなった時、こういうのを作りましてね、私も寄稿しました」

といって足立氏はめくる。自分の文章を探しあてると、

「題名が不用意だった」

と言いながら見せてくれた。「私と南京大虐殺」という題の短い文である。さきほど話してくれた南京での出来事が書いてある。その光景を足立氏は守山記者と二人で見て、悲しんだと書いてある。ただ、足立氏は「私と南京大虐殺」の題をひどく気に病んでおり、結局、今日の聞き書きも、地の文は別にして、話の部分は公表前に足立氏が確認することになった。自分の発言が曲解されるのを恐れているのであるが、当時の南京の様子を証言できる人は限られている今、それは当然でもあろう。

南京では一緒だった二人は、その後離ればなれになった。足立氏は杭州へ。そして守山

氏はしばらく南京に残ったあと、帰国して特派員としてベルリンに行く。しばらく守山記者の回顧談と礼讃が続いた。十分間ほど続いた後、思い出したように次の様な話を披露してくれた。

「今年の春に朝日新聞の論壇係から私のところに電話がありましてね。守山君がベルリンにいた時の話です。

ベルリンで、守山君は日本の留学生と飯を食ったことがあり、その時留学生に、南京で大虐殺があったと語ったというのです。その留学生が今は有名な大学教授になっているそうです。私は彼の名前を聞くのは初めてでしたが、その大学教授がベルリンで守山君から聞いた話を論壇宛に送ってきたというのです。

守山君の語った話というのは、日本軍が南京で老人・婦女子を殺し、あまりたくさん殺したので、道路が血でいっぱいになり、守山君がはいていた半長靴に血が流れ込むほどだった、というものです。守山君がこういう話をしたというのです。

論壇の係は、私が南京で守山君と一緒だったし、親しかったということを誰かに聞いて、この話を確かめようと電話をかけてきた訳です。

そこで私は、たしかに南京では守山君と一緒でしたが、そんなことは見ていないし、後で守山君から聞いたこともない、守山君は嘘をしゃべるはずはない、その大学教授はどんな人か知らないが、その人が言っていることは嘘だ、そういうことが載るなら守山君の名誉のために残念だ、と言いました。

論壇係は私の話を聞いて納得したようです。教授の原稿をボツにしました。南京大虐殺については意識的に嘘をついている人がたくさんいるんですよ」

――足立さんがいらっしゃった朝日新聞では、本多勝一記者が南京大虐殺があったと主張しているし、社会面でもよく取り上げていますが……。

「非常に残念だ。先日も朝日新聞の役員に会うことがあったのでそのことを言ったんだが。大虐殺はなかったことをね。

朝日新聞には親中共・反台湾、親北朝鮮・反韓国という風潮がある。本多君一人だけじゃなく、社会部にそういう気運がある。だからああいう紙面になる。

また、朝日の読者に本多教信者がいるらしい。出版局の人も、本多君の書いたものは売れるから出版する。たしかに本多君は熱心で積極的な記者だ。エスキモーのルポルタージュなんか立派だった。エスキモーと一緒に生活してね。ベドウィンのルポルタージュもきたない生活の中に入っていってね。なかなかできないことだ。本多君は大学の頃、山岳部にいたからその経験が生かされたのだと思う。あの頃の三部作は素晴しいものですよ。その後、中国に行ったら一方的な記事になっちゃった。中国人の言ったことをそのまま記事にするだけだ。三部作の頃のファンがまだついているのだろうね。

朝日新聞の中には本多君の態度を快く思っていない人もいますよ」

話はこの後、朝日新聞の姿勢にまで及んだ。

――昭和十二年頃の新聞の論調はどうでした?

との質問に、足立氏はまたスクラップ・ブックを開いた。

「さきほど見ていたら、こんな記事がありました」

といって切り抜きを見せてくれた。「幼児と父母の死」という足立氏の署名入りの記事である。南京を間近にした湯水鎮で、親が死んだことも知らない幼児が死体のそばで泣いている。気になって後で戻ると幼児はもういなかった、たぶん日本兵が育てているのだろう、という記事である。

「この記事は、軍からは良くないと思われたかもしれないが、朝日の社内ではほめられました。私も日本軍の勇ましい記事を書かなかったとは言わないが、今読み返してみても、敵ながらあっぱれとかいう記事を含めて、片寄らずに書いたつもりです。朝日にはそういう空気がありました。朝日と比べると、毎日はもっと勇ましかったですよ。百人斬り競争とかね」

――百人斬りの話を知ってましたか。

「ええ。あの記事を書いた浅海（一男）君も知ってますよ」

――浅海記者はライバルの新聞社の記者でしょう?

「でも何度も顔を合わせていましたよ。毎日新聞は戦争をあおるような気風が特に強かったようだが、浅海君もそんな人でね。あの百人斬りの記事は創作かもしれんな。浅海君が百人斬りを競った二人の軍人に会ったのは事実だろうが、二人の談話は創作かもしれない。浅海君は口をつぐんで何も言ってないが、心の中ではまずい記事を書いたと思っているん

じゃないかな。戦後、あの記事が証拠になって二人の軍人は死刑になったし、その中国へ浅海君は新聞の組合の委員長として行ってるんだからね」

――浅海氏とはその後も会ってますか。

「何度も会っています。最後に会った時はずいぶんやせていたが、今はどうしているか。私は先ほども言ったが、最初、第百一師団の従軍記者だった。同じ師団に従軍した毎日の記者が伊藤君といってね。船で一緒だった。この人は記者なのに、日本刀を腰にぶら下げていて、酔うと刀を抜いて暴れるんだよ。この人もあとで組合の委員長をやったが、浅海君も伊藤君もあまり知性的ではなかったように思うね」

足立氏の話はまだまだ続きそうだったが、予定の時間をはるかにオーバーしてしまったので、私の方からこの辺で、と終えた。結局、二時間近くになってしまった。

以上が足立氏の証言であるが、この証言が、足立氏の他人への誹謗の様に読める部分があるなら、それは私の責任である。実際は、活字になった以上に足立氏は躊躇(ちゅうちょ)し、しばし黙したのだが、貴重な証言という私の強要が続いたのである。

東京朝日新聞・橋本登美三郎上海支局次長の証言

橋本登美三郎氏は佐藤（栄作）内閣で官房長官、田中（角栄）内閣で自民党の幹事長を務めた戦後の保守党の実力者の一人である。その橋本氏も昭和十二年十二月、南京に入城した。

橋本氏は、昭和二年に早稲田大学を卒業して朝日新聞社に入社した。満州事変には一線の記者として取材に従事した。

昭和十二年七月、北支事変勃発の頃は南京支局長をしていた。支局長といっても、山本治記者と二人で、あとは中国人がいるだけである。各社も似たりよったりで、支局員は一人か二人であった。南京では日に日に反日の空気が強まり、危険で外も歩けない状況になった。中国憲兵が支局を護るほどであった。橋本氏は戦火が上海に飛び火するまでとどまったが、八月十五日、駐在武官補佐官らと脱出列車で浦口から青島に向った。

いったん東京に戻った後、上海に行き、上海支局次長になる。この役職は現場のまとめ役である。個々の取材をする訳でないが、記者の一人ひとりに指示し、現場全体を一番把握できる立場にある。上海戦線の取材からこの任務をつとめ、日本軍が南京攻略に向うと、そのまま従軍記者のまとめ役として参加した。

朝日新聞は多数の従軍記者を派遣したが、多くは陥落後数日で南京を去った。しかし、橋本氏はそのまま残り、昭和十三年の正月も南京で迎えている。

橋本氏は、その後新京支局長、報道部長、東亜部長をつとめ終戦を迎えた。戦後、朝日新聞社を辞めて政界に入った。郷里の潮来町長をかわきりに中央政界に進出し、佐藤元首相の側近として頭角を現す。大臣に就任した時の橋本氏のプロフィールには、新聞は「南京入城一番乗り」と書いてある。

昭和四十七年、南京虐殺が話題になった時は自民党の幹事長として田中内閣を支える大

黒柱であり、発言する時間も機会もなかった。昭和五十一年、ロッキード事件が起き、全日空ルートの一人として起訴され、南京虐殺について発言する機会は、ますます遠のいた。昭和五十八年、政界の第一線から引退した。

橋本氏から話をうかがったのは昭和五十九年秋であるが、橋本氏にとって、南京の頃の出来事は四十七年前のかすかな出来事である。氏にとってロッキード裁判と後継者のことが気がかりで、中央政界や田中角栄氏のこともあまり関心がなさそうであった。

当初、南京虐殺に関してはほとんど記憶がないとインタビューを渋っていた。しかし、橋本氏は、事変前の南京と占領後の南京をよく知る人である。記憶にあることだけで結構ですとの数度のお願いに、ようやく話してくれた。週二回は自分の事務所に行くというだけあって、八十三歳とは思えぬほど元気である。言葉もはっきりしており、歯切れよくしゃべってくれた。

——南京攻略戦以前に南京にいらしたので、南京のことは詳しいと思いますが……。

「私は支那事変が勃発した時、南京支局長をやっていてね、当時、支局は日本大使館とは離れた街の中にありました。同僚に東亜同文書院を卒業して中国語に堪能な人がいたので、街の中の方が生の情報が入って便利だった」

——同僚とは山本（治）記者ですか。

「そうです。私は中国語ができなかったから、彼が中国人とのことはすべてやってくれた」

——南京は反日の空気のため、支局長の奥様も危険だった、とその頃の記事に出てますが。

「そんなことがあったのか。うちのは、ずっと南京にいたのではなく、ちょっと会いに来ただけだと思う。その時、そんな体験をしたのだろう。

上海に飛び火したので急遽、南京支局を閉鎖していったん東京に戻り、その後上海支局に行った。上海ではデスクとして、取材はしないが記者の原稿をまとめる役だった。

南京攻略戦の時も同じ役目で、第一線にいる記者の書いた原稿は私のところに集った。各社競争だったから、どの部隊についていった方が一番乗りできるか、情報を集めて指示したりする」

——どの師団についていったのですか。

「私は京都師団（第十六師団）司令部と一緒で、中島（今朝吾）師団長が怪我をした時も一緒にいた」

——いつも師団長と一緒でしたか。

「いや。その時はたまたまそばにいて、私も砂をかぶったということです。師団長も怪我といってもたいしたことはなかった」

——中島師団長をよく知ってますか。

「その頃の師団長といえば相当偉く、師団長を直接知るような機会はなかった。そんなに偉い人とはね。京都師団の司令部と一緒に進んだということだ」

——朝日新聞全体では何人くらい従軍しましたか。

「朝日新聞からは五十人近く参加したと記憶している。従軍記者が十五人くらい、連絡員はそれ以上いた。私が全体の指揮をとっていた」

――南京では大虐殺があったと言われていますが、南京の様子はどうでした？

「南京での事件ねえ。私は全然聞いてない。もしあれば、記者の間で話に出てるはずだ。記者は少しでも話題になりそうなことは話をするし、それが仕事だからね。

噂として聞いたこともない。朝日新聞では現地で座談会もやっていたが、あったのなら、露骨でないにしても、抵抗があったとかそんな話が出るはずだ。

南京事件はなかったんだろう」

――一緒に従軍した今井正剛記者とか守山義雄記者をご存知ですか。

「彼らとはあまり話した記憶はないな。守山義雄君の印象はあまりないなあ。同じもりやまでも森山喬君なら先輩でいたけれど。守山君は政治部出身で、南京に特派員として東京から来たのじゃないかな」

――今井記者は「南京城内の大量殺人」という見聞記を書いて、二万人の虐殺があったと言っています。また、守山記者は、本人が書いたわけではないのですが、守山記者から虐殺の話を聞いたという人がいます。

「二人から直接聞いたことはないから真偽の程はわからない。二人とも、特別左でも右でもない人だよ。ただ、人間は曖昧な発言をすることがあるので、そんなのかもしれないな」

――今井記者の原稿について何か記憶がありませんか。今井記者は取材をしないで原稿を

書くという人もいます。

「今井君の原稿？　原稿は取材した人がそれぞれ書くものだ」

――入城式の原稿を、見ないで書いたと言われてます。予定稿だったらしいですが……。

「入城式の原稿が予定稿だった？　入城式なんて満州事変の時もなかったし、誰も体験してないから予定稿は書けなかったはずだ。僕が今井君に書けと言った記憶はないな。もし予定稿だったら前もって軍司令部に取材に行って、予定を聞いて書いたということになるね。入城式といっても華やかなイメージはないしねえ。今井君は形容詞の使い方が上手だから、それなりに書いたのかもしれないな。

戦争は異常な出来事だ。震災の時同様、噂程度のことが記事になっているのじゃないかな」

――いつまで南京にいましたか。

「はっきり覚えていない。しばらくしてから仮主任をおいて上海に戻っている」

――当時の報道規制をどう感じましたか。

「何も不自由は感じていない。思ったこと、見たことはしゃべれたし、書いてたよ」

以上が橋本氏のお話である。橋本氏から話をうかがう前は、もっと詳しい話が聞けるのではないかと思っていた。途中、橋本氏の記憶を引き出させようと、角度を変えては何度も質問した。終わって、冷静に考えると、これが精一杯だろうと思う。むしろ、八十三歳の老人が三十六歳の出来事をこれほどまで記憶しているということは驚きであろう。

二・毎日新聞

東京日々新聞・金沢喜雄カメラマンの証言

当時、東京日々新聞（現在の毎日新聞）のカメラマンとして従軍していた金沢喜雄氏は、戦後、『カメラ毎日』の創刊と共にその編集にたずさわり、編集長として定年退職するまで勤める。毎日新聞を辞めたあと、写真短期大学で十年間教え、昭和五十二年に福岡市に引越した。

私が金沢氏を訪れたのは昭和六十一年の二月である。住いは福岡市の郊外にあり、三方を小高い山に囲まれ、金沢氏は既に山を相手の静かな生活を九年続けていた。一人で山登りするほどであるからとても元気で、七十四歳であるが、隠居している人のようには見えない。

金沢氏は、昭和十二年十月、大場鎮が陥落したばかりの上海に、本社写真部在籍のまま派遣された。二十五歳の時である。当時、上海支局には田知花信良支局長以下、枝松茂之（のち、毎日新聞常務取締役）、志村冬雄などの記者がおり、東京から相次いで特派員が派遣されていた。金沢氏もその一人であった。

金沢氏が上海に渡った頃から膠着した上海の戦線が急速に動きだし、日本軍は南京に向

けて進み始めた。金沢氏は、南京攻略下令後最初の戦いである江陰砲台攻撃に従軍した。

――南京に向うのはいつですか。

「江陰の従軍から戻ると、第九師団の脇坂（次郎大佐）連隊長が連隊旗と共に第一線を進んでいる、危いところを一人でも行く、と支局で話題になっていまして、実際、その時、脇坂部隊長についていった読売の記者と朝日のカメラマンが死んだばかりでした。それで、南京攻略軍のうちで脇坂部隊長が南京一番乗りをするのではないかという予想になり、ちょうど戻ってきたばかりだった私が、脇坂部隊を追いかけることになりました。

すぐ出発して、無錫（むしゃく）、常州（じょうしゅう）を通って、何日かはっきりしませんが、とにかく脇坂部隊長に会うことができました。場所は南京の手前だったと思います。それからは脇坂部隊長に付きっきりでした。

十二月九日の夜が明け始めた時、二十町ほど先の朝もやの中に、大きい城壁がぼんやり見えました。それが南京城でした。あたり一面はシーンと静まり返っていました。ちょうど真ん中に門があり、この門が光華門で、光華門から大きい道路がわれわれのいる方に伸びていました。しばらくすると、その道路の脇の街燈が一斉につきました。中国兵は、光華門の中に逃げ込んで、日本兵が来るのを、今か今かと待っていた訳です。いよいよ日本軍が見えたというので、街燈をつけたのだと思います。

それから一斉に攻撃が始まりました。城壁の周りはクリークで、光華門に通じる大きい

道路以外攻めようがありませんので、この道路から攻めました。それだけに中国兵も日本兵を狙い撃ちができたと思います。脇坂連隊長は、クリークの手前の土手の下にある防空学校に進み、われわれも一緒に防空学校に入りました。そこは光華門から六百メートルほどの所です。

伊藤（善光少佐）大隊は光華門までたどりつきましたが、光華門は二重になっているうえ、中国軍の攻撃が凄まじく、次々にやられてなかなか進めません。

土手から撮ろうとして顔を出すと、中国軍が一斉に撃ってきます。防空学校の屋根も吹っ飛び、その中で脇坂部隊長は光華門の伊藤大隊を見ていました。この頃、写真を撮ろうにも動けず、仕方がないので脇坂部隊長が洗面しているのを撮り、あとでこのフィルムを本社に送りました。普通、部隊長の写真は発表できなかったのですが、この写真だけは許可されてます」

――南京城内の様子はどうでした？

「日本軍の一部は揚子江沿いに行き、杭州湾から来た軍は、大きく迂回して南京に進みましたから、南京は完全に日本軍の包囲態勢になってます。ですから中国軍の大部分は揚子江から逃げ、チンピラ兵がおさえに各門にいて、この兵と日本軍が最後に戦ったのです。そういう状況で日本軍は南京に入りました。私も光華門から入りました。

戦後、この時、何万人からの虐殺があったと言われていますが不思議でしょうがないのです。私は南京をやたら歩いてますが、虐殺を見たことがなければ兵隊から聞いたことも

ありません。毎日新聞は、あの時、連絡員も入れて五、六十人もいたでしょうか。最初、中山門から入った旅荘を宿舎にして数日間いました。新聞社の仕事は陥落するまでですから、東京から来た連中はすぐ帰りました。そこで、十二月二十日頃、宿舎を中山北路にある外交部に移して、上海支局の連中が残りました。志村冬雄が支局長で、カメラマンが必要だというので私も残りました。志村のあと支局長になった村上（剛）もいたと思います。私はここに一カ月ほどいましたが、戦後言われているようなことは、何も見ていなければ、聞いてもいません。ですから、虐殺があったと言われていますが、ありえないことです。松井（石根）大将が絞首刑になったのも、不思議でしょうがないのです。

私はその頃ペイペイでしたから、軍の参謀と話すようなことはありませんでしたが、志村さんはそれまでも南京支局長をやっていましたし、軍司令部にも行ってましたから、志村さんから聞けばもっとはっきりしたと思います。志村さんは亡くなっていますが、虐殺があった、と言ったことも聞いたことがありません」

――死体は全然なかったのですか。

「いや。敗残兵がたくさんいましたし、戦争だから撃ち殺したり、殺して川に流したことはあるでしょう。それは、南京へ行く途中、クリークで何度も見ている死体と同じですよ。あれだけの戦線で、しかも完全なる包囲作戦をとっていますから、死体があり、川に死体が流れているのは当たり前です。殲滅するためにわざわざ包囲作戦をとったのですよ。

また、南京城内も戦場になったところですから、難民が撃たれて死んでいるのは当然で

しょう。そういうことはあったと思います。それが戦争です。それを虐殺というのなら、戦争はすべて虐殺になりますし、それは戦場を知らない人の話です」

――揚子江沿いはどうでしたか。

「よく、揚子江に相当大量の死体を流したとか、揚子江が赤くなったなんて言いますが、私は聞いたことはありません。もちろん見たこともありません」

――新聞社の中で話題になったことはありませんか。

「一度もありません」

――同じ東京日々新聞の浅海一男記者は、虐殺があったと言ってますが……。

「浅海君ね。彼は私と同じでちょっと変わった男ですがいい人間ですよ。本社の社会部から来た人でね。私が南京に行く途中、無錫あたりで会ってます。上海から南京に行くには無錫、常州という幹線を通っていきますからね。その後、私は光華門の方に行きましたから別れてます。南京に入ってから中山門のところにあった旅荘で会いましたが、何も言ってませんでした」

――南京を離れてから虐殺について何か聞きませんか。

「私は南京が陥ちたら戦争は終わると思っていましたし、そんな気持で入城式を撮っていました。ところが、それで終わらず、結局、大東亜戦争まで続き、私もそのまま上海支局に残ることになりました。

南京陥落後、特別仕事もなく、一カ月ほどぶらぶらして、それからいったん上海に戻り、

その後何度も南京と上海を往復しました。汪政権ができる時も汪兆銘を撮るため上海と南京で仕事をしましたが、虐殺の話は一度も聞いていません。

戦後になって、その時々の記録や体験記を読むと、間違っていたり、自分勝手な記事があまりにも多いのでびっくりしました。南京虐殺もそういうものです。今さらそれを言ってもしょうがないと思い、今まで言ったことはありませんでしたが、今日は聞かれたので言いました」

金沢氏は、私がうかがうというので、当時の写真を探してみたが、参考になるほどのものはなかった、と言いながら、代りに、身ぶり手ぶりを交えて話して下さった。

東京日々新聞・佐藤振寿カメラマンの証言

昭和十二年当時の東京日々新聞（現在の毎日新聞）を見ると、佐藤振寿（しんじゅ）氏の撮った南京戦の写真が度々掲載されている。しかし、佐藤氏が一般に知られるようになったのは戦後である。それは、十年ほど前、南京での百人斬り競争がフィクションだったと話題になった時である。百人斬りの向井（敏明）・野田（巌）両少尉を常州門外で撮ったカメラマンが佐藤氏だった。また、南京事件について、佐藤氏は『〝南京大虐殺〟のまぼろし』『一億人の昭和史』などに明快な発言もしていた。

昭和六十年秋、当時の南京の様子と南京虐殺についてうかがいたいと申込むと、気軽に

承諾してくれた。約束の日、藤沢のお宅にうかがうと、すでに佐藤氏は数多くの資料を用意して待っていて下さった。当時書いた手帳大のメモ、ライカでプライベートに撮った南京の写真、それに写真のスクラップ・ブックなどである。佐藤氏はこれら資料をもとに、地図を拡げて話して下さった。

佐藤振寿氏は昭和七年、東京日々新聞社にカメラマンとして入社した。昭和十二年九月下旬、第百一師団が上海に派遣されるや、伊藤記者と共に従軍する。第百一師団の上海戦を取材した後、十一月十三日には、台湾守備隊の重藤支隊の白茆口上陸作戦を浅海（一男）記者と取材した。取材が終って、白茆口（はくぼうこう）から巡洋艦に便乗して上海に戻った。そして、すぐ南京に向けて出発する。その時、二十四歳の若さであった。

南京に従軍した後、佐藤氏は、東京に戻り、昭和十四年には再び汕頭の上陸作戦に従軍している。しかし、従軍生活がたたって、昭和十六年には結核に罹り、従軍や新聞社の不規則な生活は無理となり、東京日々新聞社を退社した。退社後、情報局の外部団体、写真協会でカメラ雑誌の編集にたずさわることになった。それ以来、写真に関する仕事をやり、写真評論家として活躍してきた。戦後、執筆活動が多かったせいもあり、南京事件に関する様々な著作をよくご覧になっていたようである。

――白茆口のあと南京に向うのですね。

「ええ。私はもともと第百一師団の従軍記者で、白茆口から戻った時、第百一師団は上海

にいたし、台湾部隊の敵前上陸にも従軍したので、これで休めると思っていたところ、急に蘇州に行けと言われましてね、十一月二十日だったと思います。そこで崑山まで車で行き、そこから線路に沿って蘇州に行きました。

蘇州に着いた時は雨で、師団司令部に行きましたが、東京日々新聞の従軍記者がどこにいるかわからず、もう夜ですから社旗も見えない、そこで寒い蘇州の街の中を大声で東京日々新聞の名前を呼んで、ようやく探しあてました」

――そのあと、どういうコースでしたか。

「蘇州から無錫、常州、丹陽を通って、磨盤山山系に向ってます。

無錫では脇坂（次郎大佐）部隊長についていきましたが、鈴木二郎（東京日々新聞記者）君と一緒だったと思います。この時、廃水用の溝で膝を捻挫して、それが今でも痛み、寝返りがうてない時があります。

常州では百人斬りの向井少尉と野田少尉の二人の写真を撮りました。

煙草を持ってないかという話になって、私は上海を出る時、ルビークインを百箱ほど買ってリュックのあちこちに入れてましたので、これを数個やったら喜んで、話がはずみ、あとは浅海記者がいろいろ聞いてました。私は疑問だったのでどうやって斬った人数を確認するのだと聞いたら、野田の方の当番兵が向井が斬った人数を数え、野田の方は向井の部下が数えると言っていました。よく聞けば、野田は大隊副官だから、中国兵を斬るような白兵戦では作戦命令伝達などで忙しく、そんな暇はありません。向井も歩兵砲の小隊長

だから、戦闘中は距離を測ったり射撃命令を出したり、百人斬りなんてできないのは明らかです。

戦後、浅海にばったり会ったら、東京裁判で、中国の検事から百人斬りの証言を求められている、佐藤もそのうち呼び出しが来るぞ、と言ってましたが、私には呼び出しが来ませんでした。浅海が、あの記事はフィクションですと一言はっきり言えばよかったのですが、彼は早稲田で廖承志（初代中日友好協会会長）と同級だし、何か考えることがあったんでしょう。それで二人が中国で銃殺刑になってしまいました」

――浅海記者とはずっと一緒だったのですか。

「その時はたまたま一緒だったのです。彼は南京陥落後、戦勝報告講演のため帰京しました。師団司令部には最初から必ず一人か二人地元の記者がつき、有名な連隊にも記者がついてました。それ以外の記者は遊軍です。私は遊軍で、浅海や鈴木など東京から来た連中も遊軍でした。それで一緒になることが多かったのです。

その時、軍ではどの部隊が南京一番乗りするか競争でしたが、われわれ記者の間でも、誰が一番乗りの部隊を取材するか競争でした。無線のある前線基地には、上海の支局から、情報とか指令が届いていて、どの師団についていったら早いとか、どの師団につけとか言ってました」

――それで第九師団についたり、第十六師団についたりしていたのですね。

「そうです。結果として、私や浅海や鈴木は第十六師団（京都）についていく形になりました。

――磨盤山山系を越えたあとはどんなコースですか。

「淳化鎮と湯水鎮の間を南京に向い、十日頃中山文化教育館に着きました。中山文化教育館は紫金山の中山陵近くにあり、四階建ての建物で、中にはガラスケースに入った古物がありました。この頃も食糧の欠乏に悩まされました」

――中山文化教育館にはいつまでいましたか。

「十三日の南京入城までいました。他社の記者と一緒に一部屋を使い、隣の部屋は第十六師団の草場旅団司令部が使っていました。旅団司令部に、南京陥落はいつかと聞きに行くと、今日はまだだ、と留め置かれ、ここには結局、三日ほどいました」

――大宅壮一氏（評論家）が当時の『改造』に、佐藤さんと会ったと書いてますが……。

「その頃、大宅壮一は学芸部の社友でしたから、南京には準社員として来ていました。そこで私が大宅を中山文化教育館に連れてきたのです。彼はどこで入手したのか中国の古い美術品を持ってましてね。大宅だけでなく、記者にもそういう人がいました。その頃は『十割引きで買ってきた』という言い方があってね、中国には古い仏像とかがありますから、そういうものを略奪する人がよくいました」

――南京に入るのは何日ですか。

「十三日の早朝、南京が陥落したと起こされ、中山文化教育館から尾根を少し行きますと、そこが中山陵で、ここを通って中山門から入城しました。先頭の兵は夜が明ける前に入っ

てたようです。中山門から双眼鏡で城内を見ると、遠くを中国兵が中山東路を横切って行くのが見えました。よく見ると茶の軍服でね、茶の中国兵もいるのかと思っていましたが、実は日本兵で、もう第六師団が城内に入ってた訳です。カメラマンの金沢喜雄が脇坂部隊についていって、既に光華門に立てられた日の丸を撮ってますから、占領は第九師団か第六師団の方がわれわれより早かったようです」

――南京城内の様子はどうでした？

「十三日はまだ戦闘があって、中国兵があちこちにいて危険でしたが、城内はおだやかでした。中山門から入って少し行った右側に励志社があり、ここを毎日新聞の宿舎にしました。ソファの椅子とかビリヤード台があって、誰がどこに寝るかじゃんけんをして、私はビリヤード台になったので喜んだら、緑のフェルトの下が石で、冷えて困ったことを覚えています。翌日でしたか、近くの中国旅荘にかわりました。ここにはベッドがたくさんあって助かりました。私が南京にいる間はここが本部でした」

――十四日はどうでした？

「入城した日は中山門で様々な写真を撮りましたが、南京陥落を象徴するような写真をもっと欲しいと思っていると、南京の支局長をやっていた志村冬雄が国民政府の建物があるというので連れてってもらい、ここで、社旗を振った写真を撮りました。私が行く十五分前、朝日のカメラマンが行って敗残兵に攻撃され撮れませんでしたので私の写真が特ダネになり、号外になりました。もうこの日は難民区の近くの通りでラーメン屋が開いており、

昭和12年12月12日、東京日々新聞の前線本部で、左から東京日々新聞社会部副部長・金子氏、一人おいて前南京支局長・志村冬雄氏、佐藤振寿氏、右端が大宅壮一氏。

日本兵が十銭を払って食べてました。

それと十四日頃は中国人の略奪が続いて、中山路を机を運んでいる中国人や、店の戸をこじあけ手を差し込んで盗っている中国人もいました。この日も一部ではまだ中国兵との戦いは続いてました。

十四日のことだと思いますが、中山門から城内に向って進んだ左側に蔣介石直系の八十八師の司令部がありました。飛行場の手前です。建物には八十八師の看板がかけてありました。ここで、日本兵が銃剣で中国兵を殺していました。敗残兵の整理でしょう。これは戦闘行為の続きだと思います。

戦場のことを平和になってから言っても無意味だと思いますが、兵隊には敵愾心があり、目は血走っていました。

私と一緒に従軍した伊藤記者は、つねに日本刀を持っているような人でしたが、上海の戦場で加納（治雄大佐）部隊長の戦死にショックを受けて東京に送り返されていますし、慰問で上海に来た高田保（劇作家）や坂東三津五郎も上海に着く早々、戦場にびっくりして翌日には帰ってます。戦場はそういうものです」

――十五日はどうですか。

「十四日だったかもしれませんが、南京の大使館を開くというのでそれを撮りに行きました。映画班に開田靖一というディレクターがいて、東大でフランス語をやった人ですが、その時、外交官として南京に来ていた福田篤泰（領事館補）と高校が同級だったので、彼がそのニュースを持ってきまして、それで、大使館に入って国旗を掲げるというところを撮りました。

それから何人かで車で城内をまわりました。難民区に行くと、中国人が出て、英語で話しかけてきました。われわれの服装を見て、兵隊でないとわかって話しかけてきたのでしょうが、日本の兵隊に難民区の人を殺さないように言ってくれ、と言ってました。この時、難民区の奥が丘になっていて、その丘の上の洋館には日の丸があがってました。全体としては落着いていました」

――難民区に入れましたか。

「入口は閉って、中国人がいて入れないようになってました」

――十六日はどうでした？

「十六日は中山路で難民区から便衣隊を摘出しているのを見て、写真を撮ってます。中山通りいっぱいになりましてね、頭が坊主の者とか、ひたいに帽子の跡があって日に焼けている者とか、はっきり兵士とわかる者を摘出してました。髪の長い中国人は市民とみなされてました」

――十七日はどうでした？

「入城式があった日です。入城式の様子をなるべく上から撮ろうと思い、前の晩からはしごを三本ほど探して用意しておきました。それを二、三本おきに電柱にかけておいて、松井大将が中山門から入ってきた時、このはしごに昇って撮りました。一枚撮ってから次のはしごに移って先に行き、また昇って撮るというように何枚か撮りました。

この時、木村伊兵衛や渡辺義雄（共にカメラマン）が外務省の嘱託で写真を撮りに来ていて、いつもは写真を撮ってる私が逆に撮ってもらいました。ＮＨＫも来て放送していたようです。

入城式と翌日の慰霊祭の写真でだいたい私の仕事は一段落しました」

――虐殺があったと言われてますが……。

「見てません。虐殺があったと言われてますが、十六、七日頃になると、小さい通りだけでなく、大通りにも店が出てました。また、多くの中国人が日の丸の腕章をつけて日本兵のところに集ってましたから、とても残虐行為があったとは信じられません」

――直接見てなくとも噂は聞いてませんか。

「こういう噂を一度聞いたことがあります。なんでも鎮江の方で捕まえた三千人の捕虜を下関（シャーカン）の岸壁に並べて重機関銃で撃ったというのです。逃げ遅れた警備の日本兵も何人かやられたと聞きました。一個中隊くらいで三千人の捕虜を捕まえたというのですから、大変だったということです。もちろんその時は戦後言われている虐殺というのではなく、戦闘だと聞いてました。

捕虜を捕まえても第一食べさせる食物がない、茶碗、鍋がない、日本兵ですら充分じゃなかったでしょうからね。私らも上海から連絡員の持ってくる米が待遠しい位でしたから」

――下関をご覧になりましたか。

「ええ。入城式後だったと思います。行きましたが、噂で聞いたような跡はありませんでした。私が行った時は、苦力を使って軍が酒樽の積み下しをやってました。見てる時、一人の苦力が酒樽を落しましてね、こりゃ、あとで怒られるだろうなと思いました」

――社内で虐殺の話が出ませんでしたか。

「誰と話したこともありません」

――南京では、どこに行くにも写真を撮ってましたか。

「仕事用と個人用カメラを持っていて、個人用のライカは買ったばかりでよく撮ってました。慰霊祭のあとは主に個人用で街を撮ってます。その時、日本兵の死体を撮ってはだめだと言われてましたが、私は死体であろうが何であろうが撮ってました。

この時、百枚も撮りましたが、後になって見ても、日本兵が残虐なことをやっている写

難民区で宣撫班が食糧や菓子などを配ると、大人も子供も大勢が集まってきた（昭和12年12月18日）

真は一枚もありません。この中には日本兵が慰問袋を配って、中国人が群がっている写真などもあります。そういう状態ですから、虐殺ということはたまたま私が見ていなかったのでなく、なかったのだと思います」

――仕事で撮った写真には佐藤さんが説明をつけるのですか。

「そうです。フィルムのタップに撮った日と場所と簡単な説明をつけて、これを連絡員が上海に持っていきます。上海で現像して長崎に船で持っていき、福岡から東京へ電送したと思います。東京で軍の許可を得る訳ですが、ネガは途中の大阪本社が保存してました」

――その時の写真は毎日新聞のものになるのですか。

「そうです。私が撮ったといいまして

も、毎日新聞に属してます」

――佐藤さんはなかったと言っても、その時の写真には残虐行為という説明がついてますね。

「ええ、写真は説明一つでどうにもなりますから。

十五日、私が南京城内で撮った写真に、日本兵が荷物を背負って、向う側に乳母車が写っている写真があります。私も経験がありますが、荷物というのは重くて、それで中国人に背負わせたり、ロバの背に乗せたりしました。私は無錫で膝を痛めていましたので、磨盤山山系を越える時は本当に苦しくて、朝、遅れないように人より早く出発しても最後は皆に遅れましてね、ですから兵隊の荷物のこともよくわかります。私が見た日本兵は、南京に入ったので気がゆるんで肩の力が抜けたんでしょう、肩をがっくり落として歩いていました。それを見た時、兵隊の気持がよくわかったので撮ったのですが、いつの間にか、『徴発した荷物を運ぶ日本兵』という説明がつけられてます（左ページⒶ）。

また、同じ場面を撮ってるのに、虐殺の場面だと言う人もいます。同盟通信の不動健治さんです。戦後しばらくして発表した写真（『日本写真史1840―1945』平凡社）にそういう説明がついていました。同じ様な場面を大毎の松尾邦蔵や私が撮って、虐殺の死体ではなかったし、それには『倒れているのは中国兵の戦死体』と説明をつけています（左ページⒷ）。私は不動さんをよく知っていて、不動さんから南京で虐殺があったなんて聞いたこともありませんでした。彼の弟さんとも親交があるので、気がついた時にそのことを言

Ⓐ疲れきって荷物を運ぶ、年老いた日本兵たち。手前では子供用のボートの形をした乳母車を引いており、写真奥ではロバの背に荷物を載せている（1937年12月15日）

Ⓑ空襲の爆風で死んだ中国兵の戦死者たち（1937年12月13日　毎日新聞社提供）

ったら、兄貴はもう頭がぼけているから言ってもわからないだろうと言ってました。なんでも戦後、なにか虐殺の写真がないかと言われて、その写真を出したと聞きました。不動さんは先日亡くなりましたが、弟さんと話した時のテープはまだ持ってます」

――いつまで南京にいらしたのですか。

「二十四日までいました。二十四日の午後にトラックに連絡用のオートバイを載せ南京を出発しました。道路には大きな穴があってたいへんでした。途中一泊して二十五日早朝に上海に戻り、上海には昭和十三年の二月までいて、その後で東京に戻りました」

――南京事件を聞いたのはいつですか。

「戦後です。アメリカ軍が来てからですから、昭和二十一年か二十二年頃だったと思いますが、NHKに『真相箱』(『真相はこうだ』一九四五年十二月九日～。後に『真相箱』と改題。企画・脚本・演出をGHQ民間情報局が手がけたもの)という番組があって、ここで南京虐殺があったと聞いたのがはじめてだったと思います。たまたま聞いてましてね。テーマ音楽にチャイコフスキーの交響曲が流れた後、機関銃の音やキャーと叫ぶ市民の声があって、ナレーターが、南京で虐殺がありました、と言うのですよ。これを聞いてびっくりしましてね。嘘つけ、と周りの人に言った記憶があります。

十年ほど前にも朝日新聞が『中国の旅』という連載で、南京では虐殺があったといって中国人の話を掲載しましたが、その頃、日本には南京を見た人が何人もいる訳です。何故日本人に聞かないで、あのような都合よい嘘を載せるのかと思いました。当時南京にいた

人は誰もあの話を信じてないでしょう。それ以来、私は自宅で朝日新聞を購読するのをやめましてね。その時、配達員に朝日は嘘を書いているからやめる、と言いました。

よくあることですが、被害者は誇張して被害を語るものです。ことに南京陥落の頃には朝日の記者やカメラマンが大勢いました。そうした人たちの証言が欠けていて、一方的な被害記事に終始していたので、その記事の信頼性に疑問を感じたわけです」

以上が佐藤氏の証言である。

私が話を聞いた数十人の証言者の中で、佐藤氏の証言が最も詳しかった。説明もリアルで、とても五十年も遠い昔の出来事の様には思えない。佐藤氏の証言が詳しいのは、たぶん氏が証言者の中で最も若い一人ということもあるが、手元に数多くの写真があり、常に自分の体験を反芻できたからであろう。ここに証言していることも、ほとんど写真があるものである。

大阪毎日新聞・五島広作記者の証言

南京攻略戦に従事した記者の中で、戦後、南京事件について最も積極的に発言したのは五島広作氏であろう。その代表は、昭和三十九年に発行された『南京作戦の真相―熊本六師団戦記』である。この本は、第六師団が昭和十二年八月に動員され、北支で戦った後、十一月には杭州湾に上陸し、南京まで攻めのぼった半年の記録を、当時第六師団の参謀長

であった下野一霍大佐が講述したものである。下野参謀長の講述のほか、谷師団長が南京獄中で書いた申弁書、五島氏の従軍記などが収められており、五島氏が編集・出版した。

第六師団の谷寿夫師団長は、戦後、南京で虐殺事件の責任者として処刑された。下野参謀長は谷師団長の女房役であり、五島記者は従軍中、谷師団長にかわいがられ、ずっとそばにいた人である。谷師団長を最も知る二人が、谷中将と第六師団の名誉のためにこの本を出版したのである。

五島氏は十年ほど前からパーキーソン病に罹り、闘病生活を続けていたが、南京事件というと、病気をおして会ってくれることになった。五島氏は七十九歳で、しかもパーキンソン病特有の歩行困難である。私の想像以上であった。どこか静かなところに行って話をうかがおうと思っていたが、それはやめにして、近くの喫茶店で話をうかがうことにした。

椅子に座るなり、五島氏はショルダーバッグに入れてきた資料を取り出し、南京虐殺について説明を始めた。それがあまりに一方的だったので私は少しびっくりした。

そこで話が一段落した機会をとらえて、『南京作戦の真相』は読んでますので五島さんの言わんとすることはよくわかります、今日は特別聞きたいことがありお願いしました、と言って納得してもらった。南京事件について当時のことを詳しく聞かせて下さい、と五島氏に頼んでいたので、五島氏は、南京虐殺といったようなことはなかったのだと私を説得するつもりだったのであろう。

五島氏は当時、大阪毎日新聞（現在の毎日新聞）の記者として熊本支局に勤めており、第

六師団の北支派遣とともに第六師団に従軍することになった。だから、第六師団の従軍記者であり、南京攻略戦だけでなく、北支の保定（ほてい）・正定（せいてい）戦、さらに杭州湾上陸作戦にも従軍している。

――五島さんは第六師団のどの辺で従軍取材していましたか。

「いつも師団司令部にいました。北支に行く時から一緒だったので、谷師団長にかわいがられまして、作戦会議もみておけ、と谷中将の命令で藤原武参謀が呼びにくることもありました」

――崑山前後、軍の方から、中国人は女・子供にかかわらずすべて殺すべし、という命令があったといいますが……。

「そんなことはありません。私は師団の司令部にいて、師団長と行動を共にすることが多かったのですが、聞いたことはありません。東京裁判があってからの作り話ではないでしょうか」

――第六師団は北支で感状をもらってないから、中支で残虐行為をやったと言う人もいますが……。

「はじめて聞いた話です。第六師団でそんなことはありませんでした。

先ほどの話同様、谷中将が処刑されてからの作り話でしょう。戦後、中国の言い分に合わせた話がよく作られています」

——南京陥落後の第六師団の行動はどうでした。

「十二日十二時にはじめて城壁を占領し、十三日、一部城内に入りました。私もこの時、第十三連隊から選抜した部隊と城内に入りました」

——この時、残虐行為などは？

「十三日、十四日は城内掃蕩で、残虐行為などありません」

——翌年十月の漢口攻略戦では、岡村寧次中将の第十一軍の下に第六師団がおった訳ですが、『岡村寧次大将資料』によりますと、第六師団の旅団長・牛島（満）少将などが、第六師団について、軍紀が乱れていたと言っていますが……。

「漢口攻略戦は翌年のことで、私は従軍していませんのでなんとも言えません。

南京陥落直後、旅団司令部は師団司令部とは別の所にあったと思います。牛島少将は立派な方で、私はそこで牛島旅団長にも会っています。その時、虐殺とかそういう話はありませんでした。想像ですが、もしかすると、疑われるようなことがあったのかもしれませんが、虐殺というようなことはやってません」

——南京には外国の記者が残っていましたが……。

「ええ。何人かと会って話をしています」

——その時、日本軍の軍紀について話題になったことがありませんか。

「彼らとそういう話をした記憶はありません。パラマウントのニュース映画が南京を撮っていて、私もそのニュース映画に映っています。撮ったのはアーサー・メンケンです」

——五島さんはいつまで南京にいましたか。

「翌年の一月十日までいました。この間、南京のあちこちに行きましたが、虐殺と言われることは見てません。また、強姦もあったと言われますが、既に慰安所ができてましたから、戦後言われていることは嘘です。

南京攻略戦が一段落したところで谷中将が中部防衛司令官に任命され、第六師団を離れることになりました。そこで私も谷中将と一緒に上海に戻りました」

——昭和四十二年十月、テレビ番組で朝日新聞の従軍記者だった今井記者と下野第六師団参謀長が虐殺論争を行なったといわれています。これについて詳しくお聞かせ下さい。

「記憶がはっきりしません。私もその現場にいたのかあとで下野中将に聞いたのか、覚えていません。私の書いたものを見て下さい」

簡単であるが、一時間半ほどの話の主な内容は以上であった。

記憶がはっきりしないということを五島氏はおっしゃっていたので、無理に聞くことは避けた。また、病気のため、五島氏は見るからに痛々しく、もっと簡単に切り上げるつもりでいたが、途中、五島氏は何でも聞いて下さいと度々すすめるので、長引いてしまった。

東京日々新聞・鈴木二郎記者の証言

鈴木二郎氏は東京日々新聞（現在の毎日新聞）の記者として南京攻略戦に従軍し、また百

人斬り競争の記事を書いた一人でもある。戦後、鈴木氏は、これらについて、『丸』の昭和三十六年一月号に「崇った特ダネ〝百人斬り競争〟」を、同じ『丸』の昭和四十六年十一月号に「私はあの〝南京の悲劇〟を目撃した」と題して執筆した。

間もなくして、鈴木氏の証言が話題になった。鈴木氏の書いた「私はあの〝南京の悲劇〟を目撃した」を、山本七平氏、イザヤ・ベンダサン氏、鈴木明氏らが取り上げ、批判を加えたからである。それは昭和四十七年から四十八年にかけて『諸君！』誌上で長い間続いた。百人斬りはフィクションだ、南京城内の鈴木氏の証言はあやしい、と批判を加えた。

しばらくして、山本七平氏に対する反論集『ペンの陰謀』が出版された時、鈴木氏はここに「当時の従軍記者」という一文を書いた。そしてこの中で、「私はあの〝南京の悲劇〟を目撃した」に書いたものは事実であると述べている。

昭和五十九年秋、鈴木氏にインタビューを申込むと、体調を崩しているので年が明けてからにしてほしい、急いでいるのなら書簡ででも、ということだった。手紙で済まされることでもないので、しばらく待つことにした。鈴木氏は七十八歳なので無理にお願いもできないと思っていたところ、年が明けるとすぐに了承して下さった。

約束の日、鈴木氏宅を訪れると、わざわざ通りまで迎えに出てくれていた。さっそくインタビューに応じてくれたことに礼を述べた。道すがら、

「『ペンの陰謀』にお書きになったことが鈴木さんのお答えと思ってよろしいのでしょうね」

と言うと、にこにこ笑いながらうなずいた。ご自宅の部屋に招じてくれたが、既にテー

ブルの上には当時の資料が用意してあった。テーブルをはさんで相対したが、

「お役に立てるかどうか」

と鈴木さんはおっしゃった。

「お書きになっているものはすべて読んでいるつもりです。その上で疑問点をお聞きします。よろしく」

と私は言い、私が質問する形でインタビューが始まった。

日本軍の南京入城は昭和十二年十二月十三日といわれていた。鈴木氏は十二月十二日に入城したと書いている。この点が、鈴木氏の証言で確認したい第一の点である。

――十二月十二日に中山門から入城したと述べてますが、あれは勘違いで、実際は十三日でしょうね。

「いや、十二日です。福島（武四郎）という先輩と二人で十二日に中山門から入っています。まだ日本軍の飛行機が城内を爆撃し、城内ではどんどん火の手があがっていました」

――様々な記録・証言によりますと、十二日の夜半すぎ、実際は十三日の午前二時頃から朝にかけて各部隊が入っています。とすると、兵隊より先に入ったということですか。

「そんなことはありません。一番手の日本兵と一緒に入りました」

――そうすると十二日の夜半、実際は十三日の夜の明ける前に入ったのですね。

「いや、明るい時間です。中山門上で同行の映画ニュースカメラマンが、兵隊を撮るより

は、と言って私の写真を撮ってくれました」

こう言いながら、その時の写真を見せてくれた。裏には中山門上にて、とある。

——明るい時間とすると、やはり十三日と思いますが……。

「当時から私は十二日と記憶していました。軍が占領したとか入城したといっても、記者がちょうどその場にいることは少く、自分が体験した日時をあとで訂正することがよくありました。また本社が原稿を訂正することもありました。実際、新聞にどう書いてあるかわかりませんが、私は十二日に入ったと記憶していました」

——当時、メモとかは持っていらっしゃらなかったのですか。

「メモは持っていませんでした。というよりメモなどとる余裕はありませんでした。『私はあの〝南京の悲劇〟を目撃した』を書いた時も、特別メモとか資料は見ていません。自分の記憶にあるままを書きました。体験そのものがメモであり資料です」

——南京には四日間いた、ということですが、そうすると城内にいたのは十二日から十五日までとなりますね。

「そうです。十七日の入城式を見ないで戻りました。ちょうど上海に戻る軍のトラックがあったのでそれに乗りました」

——『ペンの陰謀』には「十二日か十三日に城内に入った」とか「私の記憶違いの記述」というように訂正を匂わせる表現をしていますが……。

「あの時は、山本七平にああはっきり言われたので、そうかなと思ってつい、あのように

書いたものです。やっぱり十二日です」

当時、日本では十二月十日には南京陥落などという気の早いニュースが流れ、お祝いが始まっていた。光華門は十日に一部が占領され、十二日には中華門、光華門が占領された。しかし、実際、日本軍が城内に入ったのは十三日で、中山門、中華門などからほぼ一斉に城内に入っている。当時の東京日々新聞をみても、「中山門は大野部隊の手によって十三日午前二時三十分占領された」（十二月十四日付）と書いてある。

——陸軍省発表や新聞にも十三日占領とありますが……。

「十三日占領という記事は正式発表であって、現場ではこの時以前に日本兵は城内に入っていました。城内の掃蕩が終わって静まり、はじめて日時等が公表されるので、実際より日時は遅れます」

——当時の新聞に中山門上で万歳している写真があり、十三日とありますが……。

「後続の部隊が相次いで中山門上で万歳し、写真を撮っていた。それは証拠になりません」

——従軍画家として南京に入った中川紀元氏は、『南京従軍入城』の中に、「十三日午後には先登の隊といっしょに城内に入って励志社という立派な建物の一部に陣取った」と書いてますが……。

「中川氏は一日遅れて励志社に来た。つまり、後続記者が、私たちが励志社入口に掲げた社旗を見つけて入ったのです。戦後、平和になってから、当時の状況もわからず、何もかもおかしい、おかしいとされるのは問題でしょう」

以上が入城した日に対しての鈴木氏の答である。戦前から十二日と自分で思っていたということで、自信を持ってはっきりとおっしゃった。

当時、昭和十二年十二月十二日というように、十二の数字のゴロ合わせがあって、南京陥落は十二日という印象が強い。それで鈴木氏はいつのまにか、中山門に入ったのは十二日と思いこんでしまったのではなかろうか。もし鈴木氏の言う通りとするなら、当時の新聞や戦闘経過概要などはすべて訂正しなくてはならない。

十二日か十三日かについての質問は以上で、次に旗のことに移った。

――鈴木さんは、入城してから社旗を励志社の前に立てたと述べていますが、東京日々新聞・大阪毎日新聞社発行の『従軍手帳』を見ますと、松尾邦蔵氏も旗を立ててるようです。

「各戦線に従軍した記者はほとんど旗を持っていました。だから、他の人も社旗を立てて不思議ではありません。他社と区別するため、各人が社旗を持っていたし、社旗を立てて従軍していたこともたびたびです。南京入城の際、どの門から入っても、最初に入った人が後続の記者たちの目印として社旗を立てることにし、合流してから拠点としての宿舎探しの行動をとりました。最初、中山門近くの励志社に社旗を立てましたが、軍の敗残兵捜しの捜索が始まったので、その日の夕方には近くの人影のない旅館に移りました」

こう言いながら、また一枚の写真を見せてくれた。旅館の前に東京日々新聞・大阪毎日新聞の記者が集って撮った写真である。バックの壁には「旅」の字が書いてある。四十一人の従軍記者が映っており、この中には鈴木二郎氏のほか、大宅壮一氏、中川紀元氏など

もいる。

「十二日か十三日の夜（話は十二日入城したという前提で進んでいる）、あちこちでかなり火が見えました。戦勝の火です。それを福島（武四郎）さんが、『あれが勝ちどきだ』と言ったのを覚えています。

あの時は興奮していました。想像以上の興奮です。従軍は危険でしたが、死ぬことは考えてもみませんでした。南京を陥せばおしまいという頭がありました」

次いで虐殺について質問した。論争でも問題になった一つに中山門上での虐殺がある。鈴木氏は中山門上で処刑される中国兵の表情を、あるものはニンマリと、あるものはゲラゲラと笑っていたと書いた。

――城壁の上の兵士の顔が果たして見えるものかという山本七平氏の批判に対して、城壁上に登って見たのかもしれないし、望遠鏡を持っていたのかもしれない、と鈴木氏を援護する人もいますが……。

「城内から見ました。下から見たものです。城壁の上でもないし、望遠鏡を使ったのでもありません」

十二日夜半、中山門を占領する段階で、城壁上の敵は全員掃蕩され、十三日は部隊が次々中山門上を通過している。城壁上にはもう中国兵はいないと考えられる。また、殺すためには、高いところで二十五メートルもある城壁上に連れていくことは考えられない。城壁は崩れているとしても急である。そして城壁の下は日本軍が入城してきている。

——このような城壁の上から中国兵を突き落とすというのも信じられませんが……。

「私は嘘を書く度胸はありませんよ」

確かに対面していて、嘘を言うような人とは思えない。

——中山門上での虐殺以外に直接ご覧になった虐殺とはどんなものですか。

「中山門上のほか、励志社の入口で敗残兵をつるはしで殺した場面、それと場所は覚えていないが、殺す時はこうするんだと伍長がほかの兵に言いながら中国兵を殺す場面を見ています。直接自分で見たのはこの三カ所です」

——散兵壕には焼けただれた死体があったと書いてますが……。

「それは虐殺の跡とでも言うものです。虐殺らしき跡は、光華門での累々とした死体もそうですが、それと下関（シャーカン）での死体です」

——光華門の死体については、死体はなかったと論争になりましたが……。

「確かに死体はあったし、その上を戦車が走っていました。場所は断定できないが光華門と思います。

数年前、所沢に住んでいる土屋さんという旧軍人の方が訪ねてきました。この方も光華門から入城した人で、光華門では死体を見なかった、私が本当に死体を見たのか、と言って確かめにきました。土屋さんはちょっと入城が遅れているんじゃないかと思います。その時、死体は片づけられていたのではないかと思います」

——日本軍の兵士が片づけたのですか。

「直接見たことはないが、そうでしょう」

——さきほどの下関の死体ですが、殺している現場を見たのですか。

「いや、死体を見ました。千人以上はありました」

——散兵壕の死体は戦死体でなく、焼死体だったのですか。

「ガソリンをかけて焼いてありました。これら全てが虐殺だったかどうかというと、全てが虐殺だと必ずしも言えない。しかし、それは敗戦国の運命で、虐殺になってしまいます。

確かに一緒に従軍していると、向こうをやらなければこちらがやられるし、兵士は興奮している。だから中国兵をやったのはわかります。その上、便衣隊がいて逃げたりゲリラになったりしてましたからね。兵士たちは、南京までの途中、仲間が何人も敵前渡河のクリークで死ぬのを見てるから、あの時は中国兵をやるのは当然だと思ってました」

——南京城内全域を見てますか。

「全体を見た訳ではありません。中山門と挹江門（ゆうこうもん）近くがほとんどです」

——殺しているのを見たという中山門上、励志社、伍長の虐殺の人数は全部で何人ですか。

「人数ははっきりしません。それぞれ数人だと思います。行為だけが頭に焼きついています」

——南京全体ではどの位の虐殺があったと思いますか。

「自分が見たことではないから言えない。わかりません」

——巷間二十万人とも三十万人とも言われていますが……。

「全体を知っている人は日本人では誰もいないのではないかと思います。せいぜい部隊長が自分の部隊が掃除した兵の数を知ってるくらいでしょう。今、部隊長に聞いても人数なんか言わないでしょう。

何十万人というのは極東軍事裁判などで明らかになった数字です。洞富雄氏（元早大教授）もその裁判記録などから数字をあげています」

――次に百人斬りの話を聞きたいのですが……。

「私は三回の記事のうち、最後の記事だけにかかわっています。南京へ行く途中、あれを書いた浅海（一男）君に会ったら、こういう二人がいる、途中で会ったら何人斬ったか数を聞いてくれ、と言われていた。そこであの記事になった。全体のことはあまり知らなかった」

――二人から話を聞いて、本当の話と思いましたか。

「逃げる兵は斬らないと言ってました。本当だと思いました。戦後、野田（巌）少尉が、塹壕にいる中国兵にニーライライと言って出てくるところをだまして斬った、と語ったと聞いて、裏切られた思いをしました」

――一人でも斬るのを見ましたか。

「見てません。忙しいし、ついていく訳にはいきません。少しでも前線に行って、南京一番乗りの記事を上海に送ることが頭にありました」

――当時の『文藝春秋』二月号が「新聞匿名月評」で「腰の一刀を引き抜き、支那軍塹壕

へ斬り込むのだ。真甲唐竹割、新聞記事だと、頭が真っ二つ！　講談師はだしだ。戦争は高座じゃないぜ」と、百人斬りの記事は暗にフィクションと非難していますが……。

「誇らしげに語る本人たちの話を信じるしかなかった。斬った数字を聞くことだけが頭にありました」

――最初、浅海記者が書いた訳ですが、当時の浅海記者を知っている人で、創作じゃないかという人もいます。

「創作特電はありませんよ。浅海君についてはどうかね。百人斬りに限らず軍国美談はフィクションの部分が多いでしょう。爆弾三勇士とか。浅海君とは毎日新聞の社会部ＯＢ会だったと思いますが、三十年ぶりで会いました。最初、浅海君とわからなくてね。私を見てにやにや笑っている人がいる。一体誰だろうと思いました。それが浅海君だった」

インタビューは一時間以上に及んでいる。お互いにぎこちなさが解け、冗談も出るようになった。

鈴木氏は、昭和二十一年、百人斬りの証人として東京裁判の市ヶ谷に四十日間通った。検事側証人としてイギリスの検事に調書をとられた。

「百人斬りは虐殺ではない、とはっきり述べました」

そのためか、結局、証言するまでにはいかなかった。東京裁判ではそれで済んだが、南京ではその記事が証拠になり、二人は処刑された。

「二人が中国に連れていかれてからも、できることはすべてしました。戦後知ったことで

すが、向井（敏明）少尉はあの記事で再婚できたし、野田少尉も有名になれた」

最初述べたように鈴木氏が虐殺論争に巻き込まれたのは戦後しばらくして、毎日新聞の子会社の重役として札幌に行っている時である。自分の書いたものが話題になっていると社員から聞かされ、また『週刊新潮』から電話取材があった。鈴木氏の知らないところで論争が起きていた。

「自分の書いたことが嘘と言われたことには腹が立ちました。毎日新聞で飯を食った者としてがまんができなかった。でも、その時、反論しようにもその場がなかった。

毎日新聞の名誉終身記者なので、社報にそういうことは書きました」

以上が二時間あまりのインタビューの内容であった。

帰る段になり、鈴木氏は中山門上、励志社の入口、場所が不明だが伍長が中国兵を殺した現場で、いわゆる虐殺を見た、虐殺の跡らしいのは下関、光華門らしき場所の散兵壕で見た、人数は下関の千人以上、光華門らしき場所で多数、それ以外ははっきりしないが数人程度である、南京全体でどのくらい虐殺があったのかは知らない、以上が今日うかがった話の主な内容ですね、と念を押すと、その通りですとおっしゃった。

三　読売新聞

報知新聞・二村次郎カメラマンの証言

報知新聞（現在の読売新聞）は他の新聞社と同じように支那事変勃発と共に、現地に記者、カメラマンを多数派遣した。上海には、まず五人の記者とカメラマンが派遣され、上海事変が起きると、さらに二人の記者が派遣された。百武支局長以下三人の上海支局では不十分だったからである。昭和十二年九月五日には第三陣が派遣された。それがカメラマンの二村次郎氏であった。

二村氏は十六歳で報知新聞に入社し、ボン焚き屋（フラッシュマン）から始まって、その時はまだ二十二歳のカメラマンであった。写真部の中では最も若かった。同じ頃、スペイン戦争を撮っていたロバート・キャパの例をあげるまでもなく、従軍はカメラマンとして最高の舞台である。それだけに二村氏の派遣に写真部の中では羨望する人もいた。

閘北、大場鎮、走馬塘など、上海の戦いの主なものはほとんど従軍した。十一月十一日になり上海は制圧され、日本軍が南京に向けて動き始めると、今度はそれに従った。

二村氏は翌昭和十三年の三月末まで上海にいて東京に戻り、六月には報知新聞から東京日々新聞（現在の毎日新聞）に引き抜かれた。